
ゲッター? 蓬莱幻想

廣瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲッター？ 蓬莱幻想

【Nコード】

N5455Y

【作者名】

廣瀬

【あらすじ】

時空軸の違う東京への集団遭難と、遺恨を残した友人たちの死から二年。平安ゲッターで高等部一年の春を迎えたリヒト、ミサビ、テッセン、そして、彼らと和解したミュー。リヒトは家族と再会の日を待ちながら、転生の理由となった京都でのできごとに悩んでいた。いっぽうテッセンは、留学した蓬莱ゲッターで、かつて自分が否定した“魔法”を現実にしようとする研究者と出会う。ゲッターの存在意義が問われる一年の幕開け。魔界へと変貌をとげはじめる世界で、隔離自治区と現世と天使たちの関係の、新たな局面は。

1 春雷

「ひとりの科学者の夢が、百万の無辜の民を殺す。ノーベルやライト兄弟、アインシュタインの轍を見よ。彼らの技術がもたらした、おそろべき結果を見よ。そこかしこ、無数に積み重ねられた民衆の死体——これこそが、彼らの夢の暗部が抱えた汚点である。これからのちの科学者たちよ、お前たちがもしも世にもあえかなる夢を見たとして、重々承知しておくことだ。もう一度、同じ道を通るわけにはいかない。人外よりもたらされた力を研究する以上、その危険の上に立つことを自覚しなければ。私たちの野放図な夢こそが、まさにこれから世界を滅ぼすのだから」

—— L・S・V E N E S T R O M “魔的粒子研究誌” より

*

春が出会いと別れの季節である、という考えは、ここ、蓬萊市にはない。しかし、彼にとつて、今年の春こそがまさにそれだった。いや、出会いと別れ、というよりも、それは別れでしかなく、別れというには、それはあまりに納得のいかないことであつた。

「××××××××！ ××××××××！ ××××××××！！」

テーブルを叩いて罵詈雑言を吐き散らかす。それを聞いた周囲のひとびとが、あわてて慰めの言葉をかける。ここで彼が手にしているのに相応しいのは、ワイングラスかビールのジョッキか、というところである。背景が、薄汚れたパブならなおいっそう絵になつただろう。

しかし、残念ながら、そこは真昼間のカフェであった。周囲にいたのも、友人ではなく、迷惑そうに顔をしかめた店員たちだった。「大丈夫かい」「ほどほどにしてくれよ」——彼らは、真昼間から研究所の職員がここでくだをまいていることを不思議に思ったが、スチュアートのことを、まあまあよく知っているのです、いつもの気晴らしの一種だろうと考えた。最後は「お静かにねえ」と、豊富なバストの女性店員に、軽く注意をさせるだけでほうっておくことにする。ほうっておかれたスチュアートは、さきほどよりいくぶん音量をおさえて、再び、上司をのしる。

「ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう……！」

もうすこしだったのに。

彼の頭をずっと駆け巡っているのは、その一文だった。

もうすこしだったのに。あとすこしで世界を変えられたのに。あと少しで。

いったい、何が悪かったのだろうか？

コーヒで酔うわけではないが、体内を駆けめぐる激情が、それに似た効果をもたらして、すれに彼はぐでんぐでんである。酩酊のいきおいで頭をテーブルにぶつけながら、いつ終わるともない呪詛を吐き出す。

どのくらいだったころだろうか。春風が身にしみるほど寒くなってきたとき、ようやく、彼のもとへよく知った人物がやってきた。

「ハイ、老師。ゼンマラ（どうしたの）ー？」

元、後輩の女性である。今は、大学で事務をしている。仕事帰り、という格好の彼女——小麗は、彼の隣に腰掛けて、プーアル茶を注文すると、かわいらしく首をかしげた。彼女は、かつて米国へ亡命したチベット民族の子孫である。目の前の若い男が、かつて先祖を虐待した漢民族の末裔であると知っていたが、なんとなく憎めなかった。それは、この男が、過去を気にせず未来だけをみる科学者であったためかもしれないし、今見せるような、直情径行の様子が、

ひとを心配にさせないではおかないから、かもしれない。

それはそれとして、スチュアートはそれを聞くと、理解者を得たとばかりに、がばりと顔を起こして手をふりまわした。

「聞いてくれよ！」

しかし、その顔で、事務にしておくにはもったいない、と言われる小麗はすべてを悟ったらしかった。

「ああ——ついに潰されたの」

はつきりと他人から聞いて、スチュアートはまたテーブルにつくぶした。小麗はあわてて鞆をさぐり、

「老師。しっかりして。大丈夫よ。ねえ——あ、そうだ、クッキー食べる？ お好きでしょ、チョコチップのクッキー。私、昨日焼いたの」

「おお……ジーザス……」

彼の所属する魔的研究所蓬萊支部は、他の支部と同様、ソジ粒子発見にともなうて続々と見つかった未知の粒子——総称して、それらを魔的物质と呼んだ——の、研究をしている。関わっただけで命を落としてしまったため、人間には扱えない。羽化転生した彼らだけが研究できる、いわば独占業務だった。研究の過程で副次的に得られる技術の応用が、それぞれのゲッターがあげる収益のうち、かなりの部分を占めたので、魔的研究所の各支部はいわば、それぞれのゲッターにおけるフラッグシップであった。

さて、彼らの在住するこの蓬萊市は、名前だけ見ると、アジア圏に存在するゲッターのように思われる。しかし、そうではない。蓬萊ゲッターは、米国在住のアジア系転生者のために設立された、米国にあるゲッターであった。特に、他国へ移住しても頑として自国の文化を保持し続けた、中華街、朝鮮街出身の住民が多い。そこにわずかに日本やシンガポール、マレーシアなど東南アジア人種が、欧州アフリカ圏からも合流する。もつとも歴史の新しいゲッターとしても知られている。

上海とか、香港とか、広州とかマカオとかの地名がつけられた区

に、五千人程度が暮らしていた。所在地米国の属する大西洋連合の、アトランティック・ユニオン第六のゲッターとして数えられたりもする。

チャイニーズ・スピリッツとアメリカン・ドリームがキメラのごとく、一つの町の中に特徴をみせる。今、彼らがいるのはカフェであるが、その両翼には茶館もくっついて、カフェ・ラテやバドワイザーや烏龍茶や茉莉花茶、もうもうと湯気をたてる蒸籠の点心などがごっちゃんになって売られていた。

「それで、今度はどこの部署に行くの」

「簡単に言わないでくれ。私は——私は、あきらめきれないんだ」

「でも、予算がもうもらえないでシヨ。それが、老師。老師なら、よそのゲッターの支部に移ったらいいじゃない。ヒクテアマタでしよう」

「駄目なんだ。くそ。所長が——所長さえそのままなら」

去年、蓬萊支部の所長に、新しく、スチュアート・ヒルガーという男が就任した。元、大手新聞社の会長を務めていた人物である。彼は、無駄な経費と人員を削減するために、金にならない研究からとつと撤退することをはじめ、この春、ついに、その魔の手がスチュアート（いまましいことに、彼は、所長とファーストネームが同じである）の部署にも及んだ。いわく、経費ばかりかさんで結果が出ていないから。実用化には程遠いから——たしかに、スチュアートの部署は金も人もよく食った。本当なら真っ先にきられていてもおかしくなかった、ともっぱらの、所内の噂である。しかし、部外者であつても彼らを必死にかばい、まもろうとした人間が多かつた理由は、彼の部署が、この先の世界を変えるかもしれない、最先端の技術を研究していたからでもある。研究者にとって、世界初とか、業界初、とかいうのは、命にもまさる名誉だつた。ロマンだつた。夢だつた。結果が出ていない、と言われればそれまでだが、その結果まで、スチュアートのみるところ、あと一步にも迫ろうとしていたところだったのである。もう少し待ってくれよと彼は言いたかつた。だが、その声が届くことは無かつた。

かくして、スチュアートは、コーヒーカップを手に酔っ払うのである。

「自費で——自費でできないことはない——」

「でも、次の新しい部署のトップになるんでしょ」

「私のやりたい研究ではないんだよ。惜しいところだけだね」

「でも、そっちのほうがお金になるんでしょ」

「最初からお金目当てで研究する科学者なぞ、科学者ではない。そんなものいるか！」

「ふうん。で——あと、何が足りなかったの？ もうちょっとだった、って」

「そりゃ——最後の実験に協力してくれる、人、だよ。動物実験は済んでいたからね。そうだなあ——気力体力ともに充実して口が堅く、うちのデータを持ってよそに逃げたりしない、誠実な——そうだな、軍人ならいい。一番いい。蓬萊ゲッターの軍人なら。そう思っ、て、人選しようとしてたんだよ。その矢先のことだった——あのヒルガー、鼻持ちならないやつが」

「でも、申請書があるわ。今となっちゃ、軍が許可してくれないと思う」

「連合ゲッターは？」

「もつと無理」

「蓬萊の学生」

「さらに無理」

小麗は、すましてプーアル茶のマグカップに口をつけ、スチュアートはがっくりと肩を落として、クッキーをほおばる。

「近い研究やってます、ってことで、こいつをデコイにするか——チーム自体が身売りされなかったただけまだ良かった。しかし、そうすると月例発表をどうするか——」

もそもそと呟くスチュアートを、小麗は同情の目で見た。

ふと、彼女の脳裏に、奇術めいた策が浮かぶ。

「ねえ老師。なら、こんなのは？ 要は、最後の実験に協力してく

れる人がいればいいわけよね。ちょっと危ないかもしれないけど」
「ん？」

「他国からの留学生はどうかなくて。お金でなんとかなるかもよ」
「留学生——」

「大学で、誰か適当なのが見つかるかもしれないわよ。いや、大学じゃ、自分の租界の思想にどっぷりつきすぎてるかしらね。高等部——まで範囲を広げるか——」

「あんまり頭がよくないほうが助かるね」

「ぼんやりと、考え込みながらそう言ったスチュアートだったが、だんだん、小麗の言葉が脳裏に染み入るにつれて、希望がわいてきた。」

——ありかもしれない。

彼は、すばやく計算をめぐらす。

今、彼はピンチにあつた。元、同僚のなかには、彼らがこれまで蓄積してきたデータを持って、よその、同じ研究をしているところへ移籍する、というものもある。もしもそのデータがわたつたら、彼らがどこまで事を成していたか、どういったアプローチをしていたか、ほかの支部のライバルたちに、たちどころに分かつてしまうに違いない。

ほんの一秒論文を出すのが遅れただけで、その功績が他人のものとなる、というシビアナ事実は、20世紀科学者のあいだに浸透して以来の常識だ。今、スチュアートは、誇りをかけてそこに立ち向かおうとしていた。

彼の故郷、中国——いわずとした古代中国は、羅針盤、紙、印刷術、火薬を生み出した、大いなる発明の国であつた。それが、二千年のちには、他国の眉を曇らせる、模造品の最大産出国となつていた。そこから名誉を挽回するのに二百年、自国での研究体制を確立するのに五十年。いまや、中国は、アメリカ、インド、日本と肩を並べる科学の国である。生物学の範囲で、今回はイギリスとも並ぶかもしれない。

変化した、元、中国人の大きな野望は、今、散ったかに見えた翼を再び得ようとしていた。

「ようし、やってみるか。となれば、用意は周到にこしたことはない。そうだ……私が、最初に世に出す——見ていてくれ、小麗！私が、世界で最初の魔法使いだ。私が、科学を魔法に変える！イツツアチャイニースピリット！」

「老師、がんばれえ」

たったひとりの拍手と協力のために、世界がコペルニクスの転回を迎える、ということも、やはり、奇跡の一端である。技術が飛躍するとき、たまには、こつこつとした実証の積み重ねではなく、まったくの偶然からなる、ということもあるのだ。曼荼羅のように複雑な人の動きと時間の流れが生み出す魔法が始まろうとしていた。

そして、そこにまきこまれてゆく留学生はというと、今——

春、平安市は、満開の花に埋もれていた。平安市、というこの場所に、もしも人格があったなら、あまりにも華やかに装った自分の姿にほほを染めるだろう。雪解けして久しいこの町でも、なんといつても、春の訪れをはつきりと感じさせるのは、やはり、花卉のひとつひとつがピンクの水晶に色づいて咲き誇る、桜であった。そして、それが終われば、新芽の芽吹く卯月の終わりから、すがすがしい皐月の晴天に、繁栄の緑が透かし模様をつくる。緑陰はまだ熱を持たず、静かな冷たい風がさわやかに駆け抜ける。

その、平安市にある平安学園高等部。近代的なづくりの建物のピロティには、ついさっき、試験を終えたばかりの学生たちが、ぞくぞくと現れて、立ち話をしていた。そのなかに、三人の男子学生と女子学生がいて、なにやら熱心に話し込んでいる。一人は、とびぬけて背の高い、体格のいい、ワイルドを絵に描いたような人物。二人目は、やや茶色がかった髪に秀麗な、優しげな顔立ちの少年。三人目は、身長も体格も、一人目と二人目の中間に値する、どこことなくエキゾチックな雰囲気のある少年である。香るような異国情緒以外に特筆すべき点はないが、闊達な様子が目をひいた。そして、彼のそばに静かに寄りそう少女はというと、あたるをさいわいなぎ倒す、どこことなく恐ろしくなるような、人間離れた銀髪と美貌の持ち主だった。

「ぜんぜんわからなかったな」

べつに後悔するふうでもなく、乾いた声で呟いたのは、ワイルドを絵に描いたような——テッセンである。銀モールのついた学ランの襟をはずして、やれやれというように肩をまわした。ずいぶん伸

びた髪を、雑に後ろでひとまとめにしている。

「俺も、ぜんぜんわからなかった」

情けない調子で言ったのは、エキゾチックでいつも元気——リヒトである。幼さを抜けかかった青年の顔つきで、同じく、襟をはずす。

「身体髪膚これを父母に受く、あえて毀傷せざるは孝のはじめなり？　だったか。これを平安人の立場から反論せよ——ミサビ、なんて回答した？」

「“一切衆生^{ひと}齊しく父母の恩のごとく深しと思いて、なす所の善根を法界にめぐらす。別して今生一世の父母に限らず”」

「なにそれ、どこからの引用？　どういう意味さ」

「正法眼蔵隨聞記——すべての現象を、両親から受ける愛情のように深いと思って、行動を良くしなさい。孝恩とは、特に、生みの父や母に対してたてるものとは限らない。」と

「あ、私も」

ミサビの答えに、ミューもうなずく。

「課題図書だったね。一応、覚えておいたんだけど」

「これだから優等生は」

ねえ、とリヒトとテッセンは顔を見合わせた。テッセンは「けつ」と吐き捨てると、

「こちらら演習帰りだからな。ぐちゃぐちゃ引用だの暗記だのは性にあわねえや」

不勉強のいいわけをした。

「でも、書くことは書いたんでしょう。なんて反論したの？」

リヒトが尋ねると、興味深そうに、ミサビとミューも目をしばたかせる。

「俺は毀傷してないから関係ねえって」

あごをそらし、にやりと、自分の胸を親指でさす。

「あ、そう」

たしかに、彼は、生まれながらの平安人だ——テッセンは、四月

の半ばかり二週間にわたって、類？、と呼ばれる区分の生徒の必修授業に参加していた。亜空間にとんで、仮想敵を倒す実践授業である。この類の授業が、特に、前衛と呼ばれる進路を希望するものは激増する。授業を終えてさらにひきしまった横顔を見ながら、いいなあ、と、正しい言い訳を持たないリヒトはため息をつく。彼は類？——医療、農業、芸術系に属する生徒である。後衛、後方支援組で、主に補給について学んでいる。同じく、類？に属するミューが「大丈夫だって」と慰めるように肩を叩いた。

「補修になっても、私がいるからさ。ね——リヒト」

「ああ。頼むよギン」

「まかせて」

ちつ、と、あまり聞かない舌打ちがしたほうに二人が顔を向けると、ミサビはにこにこしている。

「僕も教えてあげるからさ。ね、テッセン」

「あー、うるさいうるさい」

テッセンは、しつこいハエをはらうように肩に置かれた手を払った。彼の眉間には、深いしわがいまだに刻まれている。ミサビは、それ以上深くは追求しなかった。

ふと、誰の口からも言葉が失われる瞬間。

四人が一度に集まるのは久しぶりだった——それこそ、共通テストでもなければ、あまりに授業の内容が違うので、話も合わない。

あの事故から、一年と半年がたつ。

「このあと、どうする」

「ミューは？ このあと、用事があるって言ってだろう」

「女子寮で、寮内会議なの」

目をきらめかせた彼女の襟にもまた、高等部一年の学年章がある。結局、あの事故からまる一年、彼女は眠り続け、宣言どおり、リヒトたちの同級生となってしまった。はからずも同級生となった元・下級生たちの驚きはいうまでもないが、目覚めたあとの激変ぶりが、まして彼らを絶句させた。鬼の銀色と呼ばれた少女のとげとげしさ

はすっかり消え、今では、本当に人が変わったのでは、とまことしやかに言われる。なるほど、つましくリヒトに寄り添うさまは、はかなく、内気にも見えた。しかし、

「そういえばあんたたちは、職員室に呼ばれてるんじゃないの？」

はつきりとした物言いはそのままである。ミサビとテッセンは「ああ」と顔を見合わせた。

「そうだったな。面倒くせえなあ」

「じゃ、ちよつと行こうか。どうせ夜には会えるんだから、結果はそのとき。——二人とも、寮に戻るの？」

「うん。じゃあミュー、会議は夕方だろ？——どつか、二人で甘いものでも行こうか？」

「行く」

二人が仲良く去っていったのを見送りながら、テッセンはため息をついた。彼らの後姿は、ただの友人には見えない。当人たちがどう思っているのかはともかく、その甘やかな雰囲気は、恋人のものである。

「あいつがあんな軟派になるとは思わなかったなあ」

テッセンがぼやくと、

「まあねえ」

ミサビが苦笑する。彼もまた、茶色い髪をやや長めに伸ばして、後ろでひとつに結んでいる。彼が通り過ぎる女子に手をふる、歓声があがった。「お前もか」と呆れて、テッセンは大きく鼻から息をもらす。

「まあ——外部生なら、あのくらい普通だと思っけどね。君が固すぎるんじゃない。封建主義的っていうんだよ、そういうの」

「封建主義おおいに結構。俺は、こうはなりたくねえな」

じろじろと、中性的なミサビの容姿をためすがめつして、テッセンは腕組みした。

ミューが同級生になってからというものの、いつのまにリヒトとそんな仲になったのか、女子のあいだでもちよつとした騒動が巻き起

こった。シンが現在留学中のため、代替としてリヒトの庇護を受けているのでは、という噂だったが、リヒトのどこにも、彼女をひきつけてしかるべき魅力がみあたらないので、みんな、困惑している。幼馴染であることを知るのには、ミサビ、テッセン、今はいないが、クラスメイトのシルル、三人だけである。

ミサビにしても、誰にでも愛想がいいものの、やはり、ときどきこそそこそどこかに出かけていく姿を、テッセンは見ている。女関係だろうと探りをいれても、リヒトのようにあっさり吐かないのが癪だった——しかし、今は、リヒトとミューである。

二人がどうなっているのか、テッセンにも図りがたい。このごろリヒトが何を考えているのか、テッセンにもわからなくなっている。「そついや、素面で愛してるっていえるやつだったか。うーん、平安も変わった。隔世の感があるな」

「古くさいなあ。じゃあ、君は、好きな人ができたらどうやって伝えるわけ。まさか——和歌でも詠むなんて、天地がひっくりかえったってないだろう」

「俺は決まってる。一言、月が綺麗ですね——男ならこれできまり」

「新月だったら？」

「星が綺麗ですね」

「曇りだったら？」

「街の——明かりが……」

「昭和区限定だね、それ」

「——やめよう」

「そうだね」

ため息をつく、二人は、再び、校舎の中へ戻った。彼らにとって、この一年の予定を決める大事な申し渡し、担任からあるはずだった。

「通っただろうか」

歩きながら、いくぶん心配そうなテッセンに、ミサビは一言「なぜ」と、不思議そうでもなく言う。

「君以外に誰が行く？」

「——あの一件がある。俺たちは、いわば、あいつの身代わりでもあるはずだ。それを——出すかな」

「憶測が乱れ飛ぶのは承知の上だろうね。それでも、国家百年の計を崩すわけにはいかない。どのみち、誰かは行かなくちゃ。かえって不自然だ」

「ああ」

「行こう」

職員室のドアノブに手をかけると、ミサビは一気に開いた。

*

一方、ミューとリヒトは、学園を出て、大正区にある喫茶店へ向かっていた。

歩いていると、じぶんの隣にいるミューに、通行人の視線が集中する。それが、面映く、奇妙に照れて、リヒトは知らずのうちに早足になっていた。

「待ってよ。早いよ」

「ごめん」

あわてて立ち止まり、ミューが追いつくのを待つ。小走りにやってくる彼女の、最近ばっさりと切って短くなつた前髪が、ふわりと風に舞って、かたちのいい額をあらわにする。どの一瞬を切り取っても絵になる少女である。元、男だとは思えない、と、そのたびにリヒトは思い、もう女の子なのだから、と思い直す。

店であんみつなどつつきながら、食欲全開のリヒトを前に、ミューは思案顔だった。

「ねえ、昨日」

「ん？」

「シンから……、手紙が、来たんだけど」

「ああ」

「あとね。今度、私の——検査があるの。マテ研に、一緒に行ってくれない？」

「いいよ」

あっさりと言う。同級生になって、ようやく一緒にいられるようになってから、いつもこうだ、とミューは思い、ふと、知らないあいだに増えた彼の癖に気付いてどきりとする。彼女が眠っているあいだ、リヒトはずいぶん成長していた。すっかり背も伸びたし、横幅も増えて、以前のように子どもっぽいところが少ない。再会したとき、ずいぶんな変わりように面喰らったことが、昨日のように思い出される。

彼ののんびりとした様子にも不安を隠せなかった——ほんとうにわかつているのだろうか？ 一年と少しのあいだ、何事も無かった。だからといって、これからも何も無いとは限らない。

彼はサンプルだ。天使たちの干渉を受ける身だ。

「夜はどうするの？」

「同窓会」

これも信じられないことに、リヒトは、見かけによらずずいぶんな甘党だった。器の底に残った黒蜜まで残さず飲み干す。ミューの残したものでさらって同様に飲み干し、ごちそうさま、と丁寧に手をあわせてお茶を飲んだ。

「シンさん、なんて？」

「え？」

「他には」

「他……ええと——」

いつか草間士郎に、簞のようだと言われた目が、ミューを見ていた。特有の、どこか遠くを見るような視線の向けかた。こんなとき、ミューは、リヒトのことがよくわからなくなる。

「向こうの情勢と——気をつける、って」

「気をつける？」

「おとなしくしてろって。——そればかり」

「そう」

彼は、珍しく声を低くうなずいて、それきり、ふと何かを考え込む。

——何か、変だ。

ミューは、最近、リヒトが妙によそよしく感じられてならない。忙しい高等部の授業が始まって、進路をはからずも変更させられたことを思い出して腐っているのかもしれないし、ミューと同じ学年になったのが嫌なのかもしれない。いや、こうやってまとわりつかれるのがいやなのかも——

ほつつておくと、どんどん思考がマイナスになる。それを、リヒトは敏感に感じ取ったのか、顔をあげると「ちよつと」と、するどく声をあげた。

「ギン、ストップ——今、なに考えてた」

「なに、つて……」

答えに詰まる。こういうとき、うまく言い逃れる術を、彼女は持たない。こういうことにならないように、今までは、人をよせつけずに生活していた。しかし、すでにこの幼馴染の前で、無防備でいることに慣れている。リヒトは、ミューの緊張を見抜いて、表情を和らげた。

「的外れもいいところだよ。違うよ——俺が考えてたのは、別のこと」

「別？」

「最近、思っんだよ。ようやく、今になって、冷めてきた、ということだろう。昨日、夢を見た。修学旅行の夢を。俺が変化した日の夢」

「ああ……」

彼が、京都で修学旅行中に粒子を浴びたという話なら、すでにミューも聞いている。「どういうこと」と尋ねると、リヒトは「本当に俺であるべきだったのか、と——」

と、あごに手を当てる。これも、最近になって出てきた癖である。

そうすると、どことなく、老人めいた雰囲気は彼は帯びた。

その夜。

彼がようやく暖簾をくぐったときには、座はすっかりできあがっていた。

「遅れました、先生。このたびは、ご結婚おめでとうございます」
座敷に上がると、リヒトはまず上座へむかい、この宴の主役である恩師に、膝をついて頭を下げる。ざわめきのなかで「よしてくれよ」と相手は言った。

「いまさら先生でもないよ——それにしても久しぶりだ」

笑ったのは、キョウタローである。一年半前、平安学園の社会科教師の職を辞してから、今は、町で剣道場と塾の師範をして暮らしている。彼が結婚するにあたって、同窓会を企画したのはミサビだ。彼も今、ここへ向かっているはずである。

先に来ていた面々は、すっかり楽しくなっているようだ。さすがに素肌を出すことはしないが、だらしなく、着物やシャツの襟をくつろげて、酔ったようになって騒いでいる。

「リヒト、何飲む？」

席についたところで品書きをおしてよこしたのは、ワンピース姿のマチコである。少しでも華やかにしようというのだろう、髪に、綺麗なデイジーの飾りをつけている。女子は打ち合わせたのか、皆、髪や胸に生花をさしていた。

「会津中将」

そう決めて彼が店主を呼ぶと、

「俺もお——親父い！ 赤霧島！」

「越乃寒梅。いや、冬玲を」

「京山水」

「オ리콘ビール」

それぞれのお里がばれそうな酒の名を、めいめいが注文する。

彼らの体は、アルコールを分解しない。分解しないかわりに、吸収もしないので、飲酒の行為は単純に味をみるだけだが、酒の持つ力は、座そのものを酔わせる、という効果を、ここではもたらした。アルコールの影響を受けないので、未成年でも、高等部から飲酒が許可されている。この春待ちわびた特権を得たばかりの彼らは、なにかというと酒を飲む機会を探していた。今日と決めて解禁を待っていたものもいて、苦い、だの変な味、だの、初心者まるだしの感想を漏らしつつ、それでも楽しげに杯を重ねている。

しかし、酒が飲める、ということは、慶事でもある——そう、文字通り今回は慶事だった。キョウタローの結婚。ようやく彼に訪れた春を祝う場である。

しかし、そこでただひとり、テッセンだけが浮かない顔だった。

「どうしたの。あれは、合格だったんだろ。——また、タエコさんに怒られる？」

「ん？ いや……ああ、まあな」

長年、藤原家に仕えてきた家政婦の女ボスであるタエコは、もろの集まりでテッセンが居酒屋へ行くことを快く思っていなかった。いわく、居酒屋などは下男が行くところだから、であるらしい。藤原家の御曹司が行っていい場所ではない、という。

しかし、テッセンの悩みは、べつにある。酒が来て、一献傾けたあと、リヒトは口を開いた。

「あらためまして。こんな場で……ご愁傷様——というのも他人行儀だけど。俺も、本当にテッセンの母上が好きだった。残念だ」

「いや。——ありがとう」

「どういたしまして」

テッセンの母、藤原緑が亡くなったのは、彼らが高等部に入学してすぐ、卯月初旬、桜舞い散る春の日のことだった。つい一ヶ月ほど前になる。葬儀はしめやかに行われた。テッセンを宿したために生きながらえていた女の最期が穏やかだったことが、一家のただひ

とつの救いだつた。すでに、リヒトは、藤原家の内部の様子も知っている。最期の日まで、“火宅”にテッセンの友人として出入りしてきたし、彼から、家庭内の事情も聞いていた。テッセン自身は、葬儀後すぐに突入した実践授業のおかげで、母を失ったショックから遠ざかっていたが、最近、ようやく、心がそちらに向いていたところだつた。

「それで。母上が亡くなつてから、あの家をどうするつもり。タエコさんは」

「本宅には、いまさら、俺は戻る気はないんだ。また、国に帰るなんて、タエコもいまさら思つちやいないだろう。俺も、はいさようなら、と家から追い出すほど冷淡にもなれん。俺が生まれてから——いや、生まれる前からか。タエコはずっと母に仕えてきた。ぼんくらの末息子の面倒まで引き受けて、今じゃそれが、あいつの生きがいみたいなものだ。今までどおり、二人であの家で暮らすさ」

「家族は、それで？」

「まあ、反対されてるな。親父が特に——」
「そう」

リヒトはため息をつく。テッセンは、うんざりと、落ちてきた髪を後ろにかきおくる。

「俺の留学に関するあれやこれやが出てきてから、姉や兄まで巻き込んで、ちょっとした騒動だ。どのみち、今日はまた、本宅に帰らねえと」

彼の留学先は、米国にある蓬萊ゲッターである。彼はそこに、武術の研鑽を積みに留学する——というのが、昼間、彼とミサビが職員室に呼ばれていた理由だつた。リヒトがせがむと、テッセンは、「選考結果通知書」という、簡素な書類を見せてくれた。

「ミサビは？ あいつもそれで遅れてるんだろうけどな」

「あ、うん。一度寮で会つたけど、用事みたいだ」

ミサビもまた、秋から他ゲッターへ留学することが、さきほど決まつた。フランスにあるイース・ゲッターで、彼は語学留学である。

あいついで決まった親友二人の留学が、しかし、リヒトは心配だった。

あの事故から二年が経とうとしている。

まずまず、何事も無く過ぎた。あれ以来、妙なことも起こっていない。天使からの干渉もない。嘘のように平和だ。ときおり、彼は、自分がサンプルであるということを忘れそうになる。

逆に平和でないのは、外の世界だ。

「気をつけてね。最近物騒だって——もっぱらの噂だ」

「わかってるよ」

平和を絵に描いたような彼らの生活と異なつて、いまや、世の情勢は多難のように見えた。アフリカのゲットーでは、地域住民との間に、ついに武力衝突が起きた。きっかけは些細だ。子どもが変化したためにゲットーに連れて行かれた、という親が、他の同様の親と武器を手に、政府に乗り込んでいき、子どもを返せと直談判をした。変化したとはいえ、わが子は手元で育てたい、その権利があるはずだ、というのだ。口論のすえ、その担当部署にいたゲットーの高官五人が殺され、容疑者の身柄を引き渡す、渡さない、で、ゲットーと現世の政府のあいだで熾烈なやりとりがされた。その後、母親に同情し、政府の対応に激昂した住民が、ゲットーを包囲した。自国の軍隊までが出動して騒動を押さえ込もうとしたが、不満を爆発させた国民を前になすすべもない。最終的に、彼らに対抗すべく出動したのは、アフリカ・ゲットー軍である。そして、ついに戦端が開かれ、あつという間に戦闘は終了した。

あらかたの予想通り、敗れたのは、包囲したほうだった。死傷者は幸いにも出なかった。しかし、それこそがもつともまずいことであつた。時間を操るゲットーの住民に、物理的攻撃が効かないことがあらためてわかり、それは、全世界の人間を絶望させ、震え上がらせた。

結局、ゲットー側が寛大にならざるを得なかった。もとより、高官五人の賠償金は法律により放棄せざるを得ない。痛みわけ、とい

うように現世では見た。しかし、どうみても、ゲッター側に不満が残る決着である。何もしていないのに五人が殺され、包囲され、正当防衛で対抗すれば恨み言を言われ、賠償金まで放棄させられたのである。かくして、ゲッター内に、人間たちへの嫌悪感が広がるのであった。

「やめてほしいな。今まで平和でいたものを。いまさら戦って何になる？　そう思わねえか？」

「平和では、世界は一步も進まない、ってギンが言っていたけど」

「そうだ。しかし、なんか、きな臭い雰囲気なんだよな、最近。それがらみ、ってわけじゃないだろうが——上のほうがばたばたしてるの、知ってるか？」

「それもギンが言ってた。近々、人間側が何かしそうだって」

「ああ。そういえば……お前さ、今、ミューとは——」

「すみません、遅れまして」

歓声があがって、そちらを見ると、ミサビが到着したところだった。彼は、型どおり、元担任に祝辞と挨拶をのべると、二人のもとにやってくる。

「シルルを連れてこようとしてたんだけど、駄目だった。——また、頭痛がするって」

困ったように、肩をすくめた。

「そう。大丈夫かな」

同じく、サンプルの秘密の共有者であるシルルは、あれから、頻繁に体調を崩すようになった。以前は明るかった性格も、今ではどこか歪んで、そのギャップに自分でも恐怖を感じているようだ。シルルだけが、あの東京で別のチームにいた。彼らには分からない苦しみが刻まれているのかもしれないかった。

「お前は、秋からだっけ」

ミサビにむかって、テッセンが、留学の開始時期について尋ねる。「そう。テッセンは来月すぐ？」

「ああ。でも、夏に一度帰って来るよ。で、次がどこかは、まだ未

定。お前らは？」

「変わらず。でも、夏は、僕らは、仕事かな。去年と一緒に。別荘のついでに、遊びにきてよ——でも、今年は、向こうでの小遣いくらい稼がないと。遊んでる暇ないかも」

「私も留学だよ！」

横から声をかけてきたのは、マチコだった。いつの間にジャズミンティーをやめたのか、ワインを手に、頬を赤くして、声がいつもより大きい。

「ロンドン！ ロンドン橋渡るんだよ！ 短期なのが惜しいよ！」

「被服だつけ。ますます腕があがるんじゃない——あ、カレン。マチコを引き取ってくれる」

「お騒がせいたしましたわ」

キョウタローのせつかくの祝いの席だから、ということと呼ばれていた、現在高等部三年生のカレンは、今年、とうとう、籍を平安市に定め、これからはずっと平安市民である。「今度は私がマチコを待つからね」と喋る——彼女は、印僑であった父親と、アメリカと日本の混血の母を持つため、インドにあるゲットーと平安ゲットーの、現世なら二重国籍であった。すでに、舞踊家として、平安市以外でも名高い。彼女とマチコが、女子たちの群れに消えたあと、テッセンが、

「夏ね」

と、彼には珍しい、アンニュイな声色で言った。

「なに——どうしたの」

「何か不安でも？ いまさら？」

「いや、ちよつとな。ちよつと、相談したいことがあったんだが」

「なに？」

「来たんだよな。あれが——」

「あれってなに」

やけに口ごもり、言い洩るテッセンに、いらいらとミサビが言った。テッセンは「ここに来る前、決まったって報告しに——実は一

度本宅に行つたんだが。とうとう、来た。母が亡くなつたからだろ
うな。早いところ、俺を縛り付けておきたいんだろ——縁談が

「縁——」

さすがにミサビも絶句した。リヒトも言葉を失つたが、いち早く
回復して「結婚するのかテッセン!?」と、枳になみなみと注がれ
ていた酒をこぼした。

「しいっ」

あわてて、テッセンが彼を押さえつける。幸い、他に気付いてい
るものはいない。

「あ、相手は……?」

気の毒な女子もいたもんだ、と、友人に対してまことに失礼なこ
とを思いながらおそろおそろ尋ねると、テッセンはますます表情を
厳しくして、ぼそりと言つた。

「何、きこえない。誰?」

「——ヨラ」

「ああ、」

なんとか聞き取つたミサビが声をあげた。しかし、すぐに、その
声は、どこか、不安を帯びたものになつた。

「それは……、懐かしいね」

不思議な調子でうなずき、困つたようにひっそりと笑つ。からか
いの言葉は出ず、二人とも、顔を見合せて黙つた。首をひねるリ
ヒトだったが、次の瞬間、彼もため息をついた。

「サヨラさん、というひとはね。君は知らないだろうけど有名だよ。
通称、虫愛する姫君、という——」

「ミサオの妹だよ」

「ミサ——オ、の、」

一時期、リヒトと寄宿舎の同室だつた少年。妹がいたのか、とり
ヒトは驚いた。もちろん、ここは平安市なので、血のつながりの無
い義理の妹なのであろうが、まさか、そんなひととの縁談がテッセ
ンにくるとは。

本人も「晴天の霹靂もいいところだよな」と呟きながら、手にした杯を干す。どうやら、気の毒なのはテッセンのほうらしい、と悟って、リヒトはまばたきをくりかえす。いつもの不遜さは影をひそめ、信じられないくらい苦りきった顔である。

彼は言った。

「たしか、何度か会ったことがあるはずなんだよ。親父の会社からみのパーティーやらで。でも、俺が本宅を出てからは、そういう集まりにも無縁だったし……もう、顔も忘れちまってたな。それが、円城寺家から、俺が今どうなってるかっていう探りがあったんだと、去年の春ごろ。で、親父同士が乗り気になっただらしくてな。今度、俺が留学するっていうのを、あちらさん、いち早くどっからか聞き込んできたんだろう。そりゃ、将来有望なんだ、と、どうも勘違いして、で、数ある候補者の中から俺に絞ったってわけだ。娘とどうか、ってな。その話が、ついさっきだよ。そりゃ、こんな顔にもなるわ」

テッセンは、うんざりと頭に手をやった。

「ミサオと同級生だった、ってのも、妙に向こうの両親の気になってたみたいだな。あの日なくした息子のかわりに、なんて思ってたら、面倒だぜ。そう思うと、今から気が重い」

「お察しするよ。また、それは——光荣な、とっていいのかどうかねえ」

「光荣なもんか。あのこまっしゃくれたマセガキだぞ。どこをどうとつたらそんなセリフが出るんだよ」

「光荣って？」

リヒトが尋ねると、

「ミサオの妹っていうとね——リヒト、彼女に会ったことないでしょう。不思議だと思わない？」

「というより、今いくつなの。中等部にはいなかったよな、そんな子」

「そう、いないの。というのも、彼女、すごくてね。ある意味、シ

ンよりすごいかな。粒子操作力に関してはからつきしなただけど、学業全般においては、六歳で初等部の全課程を修了、八歳で中等部卒業資格、十になるとときには、もうすでに高等部も出てた。それで、たしか今は、十三になるはずだよ。十六のテッセンと——と、先方が考えても、まあ、おかしくない」

「簡単に言っつなよ」

テッセンは、口をへの字にした。ここまで弱っているテッセンは珍しい。

「ふうん。すごい秀才なんだなあ」

「いわゆる、そう。才媛ってやつだよ。で、今は——」

「虫愛ずる姫君」

ぼそりとテッセンが言う。

「虫めずる、……虫が好きなの」

「ちよつと変わってるんだよねえ、彼女」

ミサビが首をひねった。

「今だから言えるけど、それで、ミサオが寄宿舎に入っていた、というのもあるかもね——ああ、カレン、ありがとう」

ロゼワインのグラスを受け取って、ミサビが笑う。彼の笑顔にまったく無反応なのはカレンくらいで、悪魔的でさえある妖艶な笑みを浮かべて「どういたしまして」と下がった。

「それで、だ。親父がな。留学する前に、本人と一度会って来いっていうんだよ。先方も、本式に決めたわけでもないし、うちだってこの先どうなるかは、まだ決めかねてる、というんだ。だからとにかく一度会ってみろ、と。俺だって、ふざけるな、くらいは言ったわけよ。でも、そしたらあの野郎。会ったうえで、双方が、あまりにも気にそまないようなら、白紙に戻してもいい、という——そのくらいの柔軟さはあるわけだ、一応。ふん、だったらはいそうですね、素直に会うと思ったら大間違いだよ。そしたらさ」

テッセンは、懐から紙切れをだして、二人の前のテーブルに置いた。何か、字が書かれている。

「兄の最期についてお聞きしたいことがあります、だと。会いにいらっしゃい、だそうだ。その、サヨラ嬢本人から——ここに来る途中、アルリシャがとつかまえた虫が持っていた、その文を。向こうは、どうやらまんざらでもないのかもしれない」

「電光石火だねえ。ふうん。で？」

「行ってくるよ——一応な。兄の死に様をだしに、人のツラを拝もうなんて根性の女は、死んでもごめんだが」

ミサビとリヒトは顔を見合わせる。テッセンは、心の底から腹をたてているようだった。どん、と杯をテーブルに置いて、険しい顔で、騒ぐ同級生たちをじろりと見た。

いちだんと騒がしくなった座敷。

キョウタローの新妻であるルリが登場したためであった。拍手のなかで嬉しそうなキョウタローを見つつ、「おめでたいこった」とテッセンは肩をすくめた。彼にとっては、慶事もあてつけのように、今日は思えたようだった。

とにかく、これがこの年の春だったのである。

六月、ミサビとリヒト、ミューは、壮行会を開いてテッセンを送り出した。「手紙をくれよ」と言えば、「さつさと相棒を見つけりやよかつたんだ」と、別れを惜しむというより形式美として「姐さまあ」「ああ、ひゅうがちゃん」「お姉ちゃま、お元気でね」と言い合う彼らの使い魔を横目に毒づかれる。彼らがいれば、かくりよを介して、ただちにメッセージをやりとりできる。たしかに、思ったが、リヒトは苦笑いを浮かべるばかりだった。

使い魔について、彼は思うところがあった。ミサビから「楽しいよ」、ミューから「寮の閉門後にだって、これでおしゃべりできるのに」といわれても、いまだ、探す気になれないのも、つきつめればそのせいである。

かつて退院したばかりの頃のこと——サツキの相棒であった政宗に、新しい主に、と懇願されたこと——その、黒狐の憔悴した様子が、彼の記憶に強烈だった。どうして自分に、とおそろおそろ尋ねると「せめて、あるじの友人だったひとと縁を結ぼうと思つてな」と政宗は告げた。魂と魂で契約を結んだ主従が、突然に引き裂かれる悲しみが、その声にはあふれていた。

「なア、ご友人殿。お受けしてはいただけまいか？」

だけど、とりヒトは答えた。自分は決して故人の代わりにはなれない。「お互い、あとで苦しいだけだよ」——やんわりとお断りすると、彼は一声さびしげに啼いて、鎮守の森へと去っていく——その後姿に、そうか、俺が死んだら、そいつはどうするんだらう、と感じた。

これ以上、他の誰かの人生を狂わせられない。

「いいよ——今のところ、いなくても不自由は感じていないから。しばらく独り身でいる」

テッセンは、ちえ、と言って、頭をかいた。

「しょうがねえなあ。月に一回くらいなら、書く気にもなれるかもな。報告書のコピーでよければ送るけど」

「それはいい」

それが、最後の言葉になった。総府の人間に連れられて、彼は、マチコたち他の留学生とともに去っていった。夏まで、しばしのお別れである。

リヒトは、彼を四月から悩ませていた胸の内を、ミューにだけ打ち明けて、あとの二人には黙り込んでいた。テッセンもミサビも、ときどき妙に静かになるリヒトを不思議に思っていたが、友人の留学を前にさびしくなっているのだろうと思って、特に気にしなかった。

男の友人だから打ち明けられないことだってある。

その日、風呂からあがって、部屋に戻った彼は、男子寄宿舎の高等部伊棟——中等部のときにいた羽棟より、二畳ぶん広くなった部屋で、鏡に自分の姿を映して、見入っていた。

この目。この体。

今なら、はつきり言える。

世界に一つだけ——ではない。

彼が変化したのは、おそらく、そう、あのときだ。

脳裏に、ある場面がよみがえる。

三年前、京都、夏。

金魚のように赤い帯の端をゆらめかせて、小路を走っていた少女。同じようにたむろする学校の生徒たちのなかで、なぜ、彼らにだけ、それが起こったのか。そのむこうにいたグループだって、同じように、班のみんなであつまっていた。

そして、その、生徒たちのなかに、自分はたしかに——

そして、

「——あのニュース」

鏡の中の顔が陰しくなる。

じぶんの魂が、がイチカのハクに定着したというのなら、あるいは？

ふと、ドアが開いて、同室のグエンが入ってきた。帽子を壁のフックにひっかけると、無表情にリヒトを見る。「ただいま」と挨拶をして、屏風で区切られたスペースへ入っていく。

グエンは静かだ——ほとんど、自分のことについては話そうとしない。彼もまた、リヒトがサンプルであることを知っているはずだが、今まで一度も口にしない。

鏡に見入っていたことを見られた気まずさがあつたが、思い切つて話しかけると、

「グエン、さあ」

答はしばらくしてから返ってきた。

「なに」

衣擦れの音。彼は、授業終了のあと、どこぞへ出かけているようで、毎日帰りが遅い。やがて、浴衣になって姿を現した。

「なにか用か」

「いや。変化したとき、どうだったか、と思って。いやじゃなければ知りたい」

「俺の家は貧乏だった」

唐突に彼は言った。

「養子に出されたが、そこが寺の住職のところだった。その親父殿が、ゲッターに招待されたので、手伝いで、ここの東北の——修行場に行った。それで」

「感染した？」

「そうだ」

うなずいて、グエンはそのまま、クローゼットから写真を出した。促されて見てみると、そこには、小さい頃のグエンが、今の彼のミニチュア版といった坊主頭で写っていた。場所は、どこかの寺院のようだ。平安市にはさまざまな宗派の寺社があるが「曹洞宗」とグエンはつけたした。

「初日だった、と記憶している。これを撮った夜に、担ぎ込まれた、マテ研に」

「あ——そう」

「不思議なもんだな」

「不思議って」

「ここで暮らしてる普通の人間は多い。技術を伝えに来るもの、医療関係、政府関係。そのなかで、制御装置をつけてれば平気だ、と長年無事に暮らしてるやつもいれば、ここに来た途端に、羽化転生の憂き目を見るものもいる。その差が、不思議」

「そうだね……」

藤原家のタエコなど、その筆頭だろう。彼女はそもそも看護士で、平安大学付属の看護学校に講師として招かれ、病院で指導を行ううちに、藤原緑と知り合って、家政婦として藤原家に雇われた。それで、今もピンピンしている。

大工など、職人たちを筆頭に、無事なものはたしかに多い。

「似たようなこと、ミサビも言ってたな……」

「それで」

「ん？」

「お前が鏡を見てた理由は」

「ああ——」

□ごもっていると、グエンは「そういえば、お前あての手紙が来た」と、写真をしまいながら言った。

「手紙？」

「総府だな、あの形は」

「ああ。ありがとう。行ってみる」

理由を話さずにすんでほつとした。グエンは追求しなかった。二語文以上話したのは初めてだな、と思いながら、彼が事務室前の在籍板の前に来ると、たしかに、手紙が届いていた。名札の下にあるメールボックスからはみ出した封書を取りだし、その場で開く。書かれていたのは、なんとというタイムリーな、という通知だった。

インヴェーション、と呼ばれるものである。平安市の住民に与えられた、家族との再会のチャンスだった。毎年、抽選で選ばれたものが、平安市へ家族を招待できる。学生への割り当ては七月から八月の夏季休暇で、そのあいだは、武道も補習授業も免除される。

□

親族招待許可について

抽選の結果、貴殿の親族を、今夏、平安市に招待することを許可します。

希望者は以下の欄に、四親等以内の招待したい親族の氏名を記し、誓約書に署名捺印のうえ、同封の返信用封筒で返送願います。
総府より先方に確認のうえ、おって滞在施設、日時などお知らせいたします。

□

夕食の席で、それを聞いたミサビは「良かったね」と言ってくれた。話題はそこから、異国の地にいるテッセンやマチコの話になる。食事が終わると「足りないでしょ」とミサビは笑い、リヒトはうなずいた。

「何か、ある？」

「厨房から、野菜屑をもらってね。いいスープができてる。リゾットは？」

「いいねえ」

育ち盛りの食欲が、食物を要求してやまない。夕食のあと、デザ

ートがわりにミサビの手料理のご相伴に預かるのが、ここ半年の習慣だ。共同スペースにある丸テーブルで、チーズを散らした刻み野菜のリゾットを食べていると、下級生や同級生が次々とやってきてうらやましそうな表情で通り過ぎていく。料理人志望だったミサビの腕は、寮の生徒じゅうに知られているのだ。「今日は二人分しかないから」と、のぞきにくる生徒たちに断りながら、ミサビは、自分のぶんには手をつけず、リヒトの食べっぷりをじっと見ていた。

「それだけ食べてもらえたら、野菜屑も本望だろうねえ」

彼は笑った。

「で、味は？」

「俺は、もつと塩がきいていてもいいな」

「ふむ。なるほど」

メモをとりながら、ミサビは何を思いついたのか、薄い唇を、ふ、と綺麗な半月にする。がつがつとつめこんだあと、リヒトは顔をあげ、

「ミサビは食べないの」

「ああ、これは、僕のじゃないから。——それより、気になることがあってね」

「ん？」

「何か、考え事してるでしょ」

「どうして」

「君はすぐに顔に出るから」

「ええ？ そ、そうかな……」

「ミューとばかり喋ってるから、それも妙だって、最近気になった。テッセンにも、君については、気をつけるように言われてるし」

「なにそれ。まだ保護者きどり？」

「自分が居ない間に何かあったら、と思ってるんだよ」

「そう……」

潮時かもしれない。

よりによって、インヴェーションまで来てしまったのだ。それ

に、彼らは夏の間、別荘地でのアルバイトを予定している。家族の逗留場所は、別荘地近くのホテルに決まっていたから、どちらにしろ、ミサビには知られる運命だったのだろう。

食後のお茶を飲みながら、

「もし、俺と同じ魂をもつものがいたら、そいつも、このハクに馴染んだらうか。ねえ、ミサビ。ミサビはどう思う」

「——ん？」

ミサビは怪訝そうな顔をした。

「インヴィテーション。すごく嬉しいけど、迷ってる」

「どうして。ご両親に、会いたくない？」

「会いたいさ、すごく。会いたい——弟にも。でも、俺ね。双子だったんだ」

「双子？——双子、……ってことは、」

「そう。テッセンには、言えなかったけど——もしかしたらね」

リヒトは、満腹の腹をさすりながら、天井に吊るされたランプの炎を見上げる。

「ここにいるのは、本当は、俺の弟だったかもしれない」

これが、今年の彼の夏の引き金になるとは、彼らは露ほども知らなかった。

平安市から時差九時間の場所では、暗い空に、毒々しい色をした雲が広がっていた。もともと、天候の変わりやすい地域として有名である。ねっとりとした夜気につつまれた町の様子は、この時期には珍しくないが、くわえて春の嵐が都市を襲ったため、往来にはすでに人の姿が無い。瓦斯灯から火が消える瞬間を目にして、

「マラルメが描いた夜だな」

ふと、昔読んだ詩の一節を思い出し、その男は、窓の外を見て呟いた。もうひとり「あの雲がもしもその詩の一遍なら」と応じた。「友よ、ここに在るわれわれは何になる？」

「決まってる。偽りの薔薇色の理想だよ」

「そう、だろうか。——残念ながら、薔薇ならば、しかもそれが偽りとなれば、何色もの同類を生むものだ。われわれが一つではないように、理想もまた一つではないのだ」

窓の外は雷鳴だった。風は、狼の吐息となつて煉瓦の壁を揺さぶっている。うずまく風の模様を木々のざわめく形によって想像しながら、ロンディニウム・ゲットー——イギリスはロンドンにある大西洋連合第二のゲットー——の市長、リチャード・ブラックは「たしかに」と重々しく言った。相手は、イース・ゲットーの魔的研究所イース支部所長、ジャン・ラロンドである。二人は友人同士であったが、多くの権力者の使う“友人”がそうであるように、それは彼らにとって、子どものように純粋な意味ではない。

「その話は本当か？」

まわり道を経て、ようやく本題へ入り込む。

「らしいよ。最近、うちに来たものの話によるとね」

「この間の発表では、まだまだ——だったのにか」

「ダミーだった、と見るべきだろうな」

彼らの口調は、ともすると、独白のようにも受け取れる。向かい合っていないながら、けして視線を合わせようとしな——というのも、ラロンドのほうは、政治家を馬鹿にしきっているし、ブラツクのほうは、研究者など国の飾りだと思っている。勲章が多いほど自国のレベルの高さを誇示するのに役立つ、というわけだ。しかしとにかく、イース・ゲットーとロンディニウム・ゲットーは、同じアトランティック・ユニオンに共存する、いわば兄弟なのだし、マテ研支部同士も、現在はほとんど、二つで一つとっていいほど技術と施設が提携している。

「蓬萊か。まさか、あそこが一步ぬきんでは思いもしなかったね。生物学の分野においてはロンディニウムの右に出るものはいないし、物理学においては、イースの研究者たちが最高だと思っていた」

「最近、どこも馬鹿にできないよ。われわれの独壇場は終わった第一——魂魄、幽界といったものを説明するのには、東洋思想のほうがすぐれていたからね。生物地球学、というものを打ち出したのは、人種でフルコースができるほどの、自称、自由の国——だったし」

「呪術、錬金術、医術、音楽。そして虚構。それらが、歴史上ついにひとつになるときは近い、とな」

「この、スチュアート・チャンという奴は、間違はなく、現世で子供のころ、夢想家だったに違いないよ。ゲーム好きのオタクだった。賭けてもいい」

「君も人の事は言えないだろう」

「お互いさまだ」

陰險な笑みが唇から漏れていたが、これも、お互い、自分だけは高尚な笑みを浮かべていると思ひ込んでいる。

それはそうとして、問題は、スチュアート・チャン——蓬萊の一

人の科学者だった。引き抜くにも蓬萊市が離さず、止めても無駄なタイプだ、というのは、彼らが手にした報告書からも知れる。

「やっかいだねえ」

「ああ……」

「彼をどうにかすれば、チームは解散するかね？」

「ヒルガーが彼ごと売ってくれなかったのは痛い。何しろ、特許の問題がある。実現には、絶対に彼をこちらに引き入れることが必要だった。だからといって、もう、消すことも無理だ。ここまで抜きん出てしまっている——天才、というものはね。望むと望まざるに関わらず、彼もそれこそ、サンプルに匹敵するよ。あの、フェアシユミット——最初に粒子を発見したものや——ヴェネストロム、若さと生をすべてマテキに捧げて死んだものたちと同じ。まったく……」

「先に出せる見込みはない、というわけか？」

「ゼロとはいわないよ。アプローチの仕方は、いくつもある。もっとも有力なものが欠けているというだけで」

「そうか。しかし、それで地位を確立しても、やはりどうしても、頭を下げて売ってもらわなければならないわけだ。それには違いないだろう？」

「そう……、ふっかけられるに違いないな」

「だが、入り込める余地はある」

市長は、閃光と雷鳴のあいだに、その暗い緑色の瞳に希望の光を宿して、ラロンドを見た。ラロンドは、内心の疑問を隠して、無表情に首をかしげた。市長は低く笑い、手にした資料を机に投げ置いた。

「よくよく調べたところ、彼は、最後の実験に必要な人材を探している。それが、こちらの人間なら、たとえばどうかね」

「こちらの人間？」

「うまくいけば、裁判に持ち込める」

「裁判」

ラロンドは驚嘆した。自分には考えもつかなかった案である。法廷での決着など、この件に関しては念頭に置かなかった。彼もまた、最先端の技術は綺麗なままで世界に公開したい、と思っている人物だ。何にもまして、彼の気持ちをこの方法に向けさせなかった理由は、彼にも残っている科学者の誇りだ。これだけは、ただひとつの傷も許せない。きれいなままで世に出したい。これは、そういう種類の夢だった。あっさりと打ち壊してくれた市長に鼻白んでいると市長は、おかまいなしに「どうかね」と、高圧的な態度で迫る。

「よく考えたまえ。これしかないのではないかね」

「そう、ですねえ——」

たしかに、もつとも有効そうな手ではある。灰色の決着、といわれても、後世に名が残せるのならないか、と思われた。

「では、人選をしませんと」

「それはもうすんでいる。すでに、現地に向かわせた」

「何ですって。誰ですか」

「ミシエル・マクミラン——ハイラム・モリズロウ、それから、エレナ・ウェールズ。年齢は、十八、十七、十五。あちらが留学生をご所望らしいのでね。うちのとおっておきを行かせた。ミシエルは、君のところとの二重国籍だから、その子を選ばれば僥倖。イース市長にも話は通してあるからね」

「そうですか。では……」

「われわれの、最初の魔法使いに乾杯といこう」

市長は、机の上のベルを鳴らす。すぐに、使用人が、バケツに冷えたシャンパンを運んでくる。黄金にプラチナの泡を散らす液体がグラスに注がれる。ふせぎようのない心中の不協和音を響かせたまま、二人は静かに乾杯した。

「ところで、アフリカはどうなっているかね。あそこはまた、思いきった行爲に出た。君の意見を聞きたいね」

「アピールでしょうね」

ラロンドはゆっくりと言った。

「われわれは歓迎しましたよ。五人は尊い犠牲だが、あれで、間違いないく、ゲッターというものが、ちゃんと近所に存在する、と世界にアピールできましたから。まあ——クサマは大喜びしたでしょうな」

「ああ、それはそうだな。まあ、うちも移行は済んだからね——対岸の出来事だと笑っていられるのが嬉しいね。平安は思い切ったことをやると思ったがね。まあ、国土の問題もあるからねえ——それを思うと、平安ほど、魔法を切望しているゲッターはないだろうねえ」

「日本、か。相変わらずあの国もよくわかりませんからねえ」

「まあいいさ。それより、もしも魔法というものが現実になった場合、法整備をどうするか、というところがまた、厄介だね」

「で、それが済んだら、いよいよ戦争ですか。しかし、例のは……」
「たいしたことはないに決まっている」

「そうですかねえ」

「そうだ。君は心配性すぎるよ」

「はあ、そういわれると、言葉もないですな」

くく、と二人は笑った。

両方とも、まったく愛着を覚えない顔を見合わせていたので、雷光に混じって、別の光が窓を横切ったのに、気付かなかった。

2 留学生

一方、蓬萊市。

とはいえ、簡単にはいかないものである——と、スチュアート・チャンは、自分の思考に字幕をつけながら、構内を歩いていた。彼は、週に数回、大学の講義を聴きに行くことを息抜きとしていて、それを理由に、大学と隣接する蓬萊ジュニアハイスクール、ハイスクールのなかも自由にうろつく権利を得ていたが、彼の欲しい人材はというと、なかなか簡単には見つからないのだった。

学生たちが走り回っている。懐かしい光景に目を細めながら、彼は、手にしたジュースの紙コップに口をつける。

「他校の校章、他校の校章、他校の校章——」

留学生はさまざまいたが、いまだに、意中の人物とはぶつからず。しかも、その人物と出会ったとしても、厳しい条件をクリアしてくれるかどうかはわからない。

彼が掲げる条件は五つある。ひとつ、留学生であること。ふたつ、金で言うことを聞くこと。みつつ、出身ゲッターのナシヨナリズムに染まりきっていないこと。よつつ、強い、ということに重きを置いて疑問を持たないこと。いつつ、口がとんでもなく固いこと。

とりわけ、最後の条件は重要である。友人などに不用意にもらされては困るし、国元への報告書に書かれても困る。見る目が厳しくなるのは当然だった。

四月、五月、六月と日が経つにつれて、もうそろそろ決めなくては、という時期にきていた。小麗が、これがどうかと持ちかけてきた留学生が数人いる。とりあえずキープしておいて、彼はしかし、自分でも協力者を見つけるのだ、と意気込んでいた。なにしろ、自分の人生がかかっているのである。彼自身も忙しいが、ここで手を

抜いては絶対にいけない気がする。しかし、

——今日も駄目か。

散歩のタイムリミットが迫っていた。

『燃えよドラゴン』のテーマを口笛で吹きつつ、何気なく彼が、駐輪場へ向かうコーナーを回ったところだった。

ふと、彼の視界に、道着姿の一団が映る。オレンジをベースにした生地に、蓬萊、と白い縫い取りがされたユニフォーム。そのなかにひとつだけ、『平安祖界』の四文字を背中にしよった、白い道着姿がいた。平安ねえ、友好都市ではあるけどねえ、とそちらを見たスチュアートは、おやと思った。

——なかなか、頑丈そうな体をしている。

高等部の一年生、というのだけは分かった。口が堅そうだ、というのが、遠目に見たその少年——というには、ごつごつしすぎているし、老け顔だが——の次の印象である。彼はその一団をやり過ぎたあと、あとからやってきた同じ道着姿の一人をつかまえる。

「ちょっと」

自分がマテ研の人間であることをアピールしつつ「君たちのところに、ハイスクール一年生の、平安市からの留学生っている」

「ああ」と相手はうなずいた。

「テッセンのことでしょうか」

「テッセン？」

「平安市からの留学生ですよ。今月初めから、武術を学びに来てるんです。テコンドーは一週間で初段までいったみたいですが、うちゃあそうはいきませんから、もんでやるつもりです」

に、っと笑って、少年は胸を張った。少林寺、とそこには書かれている。

「あ、そう。ありがとう」

「どういたしまして」

一礼すると、少年は、あっというまに走り去って行ってしまった。テッセン、テッセン、とその不思議な響きを口の中で繰り返しながら

ら、スチュアートは大学の事務室に引き返した。

「小麗！ シャーオーリーー！」

「わっ、びっくりした。なあに、老師。まだ何か？」

小麗は、事務机の前でひっくりかえりそうになりながら、スチュアートに顔をむけた。事務室と廊下を隔てる窓ガラスを、スチュアートが叩くと、おっくうそうに立ち上がり、埃を払うしぐさで、両手を体の前で叩きながらやってくる。お菓子をつまみぐいしているところだったな、と彼は思ったが、小言はさておき、目当ての人物についてである。事務室の隅にある応接スペースに入り込むと、ソファに座る間も惜しく、スチュアートは、先ほど見かけた留学生について話した。

「テッセン？ テッセンテッセン、丁——ちよっと待ってね」

吐き出されたデータを持って小麗がやってくると、スチュアートはその紙をむしりとるようにして、一秒で目を通す。

「平安市は、はたちまで姓を非公開にしているところがやかいだな。しかし、いいところのおぼっちゃんには見えなかった。おそろく孤児だろう。成績は——うーむ、文武不両道もいいところだな」

「え、老師。この子にするの？」

「ちよつといいなと思ってね。体力馬鹿そうだったし。とにかく、声をかけてみようと思う」

「え、ぜんぜんかわいくないよ、この子」

「なんで女ときたら、見た目ですべてを決めようとするんだ」

「綺麗なほうがいいに決まっているじゃない。ねえ、こっちのほうがいいんじゃない？」

「一人というわけにはいかないから、君のご推薦の四人だか五人のなかからも、何人か選ばせてもらいますよ。とにかく——」

スチュアートの目が眼鏡の奥で光る。

「時間が惜しい。この生徒の詳しいデータを、できる限りとってくれるかい。蓬萊市での住所と連絡先と」

「イエスボース」

小麗は敬礼すると、言われたことをメモしはじめる。ふと、スチュアートは、履歴の年号に目を通しながら、胸騒ぎを感じた。それが何か気付いたのは、

「二年前、二年前——平安人。学生——あつ」

あの、遭難事件。

新聞記事が脳内を横切つて、急ブレーキでとまる。

驚きを飲み込んで、スチュアートは、短い髪を細い指でかきまわした。

「もしかしたら……？」

テッセンというあの少年が、サンプルという可能性はないか？

いや、もしそうなら、平安が留学生にはしない？

しかし、あの事故でかなり死んだから——逆のパターン、つまり、留学しない生徒こそサンプルである、と思わせないために、あえて放出してみる、というのもあるかもしれない——

彼は、サンプルに対しての予備知識があつた。平安にそれがあるらしいということも知っている。二年前の事故の真相が、それらからみでかもしれない、ということも。

もしもテッセンという少年がサンプルならば——そうでなくてもかまいはしないのだが——うってつけた。

武者震いに、のどの奥からうめき声がもれる。

ふと気付くと、何も知らない小麗が、不気味そうに彼を見つめていた。

「やつとツキがまわってきたぞお」

年齢に似合わない俊敏さで、五百メートル先のマテキ研究所へと走っていくスチュアートを見送った小麗は、玄関でやれやれと肩をすくめた。

「つまらないわあ。美少年のほうがいいのに」

さて、この一幕をまったく知らない留学生であるテッセンは、一キロ先の道場で寒気を感じていた。くしゃみまではしなかったが、道着から出た腕をこすって「蓬莱は空気が乾燥して、春なのに冷えるなあ」と、つたない英語でクラスメイトにもらす。それを聞いて、ジム・リーという、褐色の肌に亜麻色の髪を持つ、大柄な少年は笑った。留学中、彼を担当しているバディでもある。日常会話程度の日本語と広東語、英語を解した。

二人一組で柔軟体操をしながら、

「そりゃあ二ホンのほうが異常なんだよ。夏の京都に滞在経験のあるオレのひいひいばあちゃんが、オレがまだ小さいころ、思い出を話してくれたよ。印象に残っているのは、カビ——だそうだ。赤黒、黄色、緑、と。二ホンじゃ、カビがアニメーションになるほどなんだろう？」

母音を強調した英語で話してくれる。

「ふうん」

相槌をもらして、テッセンは、続けて友人がお手本として演じる型をまねした。

「カビとバイキンか。どっちも、まあ、たちが悪いところは一緒だもんね。たしかに、俺もごめんこうむるね」

「ごちゃごちゃうるさいぞ！ 留学生！」

「イエース、ソーリー」

師範の怒声に肩をすくめつつ、リーと笑いあったテッセンだが、もつとたちの悪いものが自分に近づいているとは、このときの彼は、思いもしていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5455y/>

ゲッター？ 蓬莱幻想

2011年11月23日17時53分発行